思い出

戦中戦後の思い出

小野英治
（会員　佐伯市弥生）

戦後六十五年となったが、六十八歳の私にとって、昭和二十年五月七日のB二九と海軍機「紫電改」の空中戦は不思議と忘れられない記憶となっている。

前年、佐伯市中村の自宅が強制取壊しとなり、旧上野村（弥生）大字井崎の現住所に転居して、祖父は裏手の凝灰岩に防空壕を掘り空襲に備えていた。

その日午前中、自宅上空での空中戦を見たのであった。早々と隣家の人と、この防空壕に避難したので、B二九の墜落は見ることができなかったが、直上空からの攻撃で主翼を撃たれ空中分解状態で落ちていったという。

このB二九は編隊であったが、エンジントラブルからか遅れたところを大村飛行場からの海軍戦闘機から攻撃されたものであった。佐伯航空隊は無力であったという。

戦後、旧明治村（弥生）で作成された書類には次のようにある（明治村役場旧蔵）。

B二九処置ニ関スル記録

一、昭和二十年五月七日午前九時頃、B二九、一機村内宇藤木山中ニ墜落ス。

一、直チニ憲兵五六名現場ニ来ル。

一、生存者一名、北海部郡津久見町西神野（こうの）ニ落下傘ニテ落ツ、同地村民ノ手ニヨリ憲兵ニ引継ギ、憲兵之ヲ帯同シテ佐伯ヘ出ズ、其ノ後ノ事情不明。

一、死亡セル人員不明ナルモ、憲兵ノ認定ハ本村ニ在ルモノ四名トノ事ナルニヨリ、此ノ四名ヲ中ノ谷橋上ニ合祀ス。

一、昭和二十一年五月七日、墓地ニテ慰霊祭ヲ執行ス。

一、同日、占領軍二名来村、墜落現状ヲ視察シ墓地ヲ撮影セラル。

宇藤木集落入り口の旧中の谷橋
右手の山に米軍死者を埋葬していた

一、同年五月十一日、占領軍三名来村（通訳ハ藤川五郎氏）ノ上、命ニヨリ墜落当時、現場ニ第一ニ駆ケ付ケタルモノ二名ヲ役場ニ喚ビ、詳細ノ事情ヲ申立テシム其ノ申立テ左ノ通リ。

1、憲兵ノ言ウ四名ノ外ニ機体ノ傍、山中ニ三名ノ死体アリテ埋葬シアリ。（河野主税ノ申立テ）

2、猶、右ノ外ニ尾翼ノアル場所ニ一名ノ死体アリ之モ其場ニ埋葬シアリ。（河野保五郎ノ申立テ）

右ニヨリ本村ニ死亡セル搭乗兵八名ナルコト判明、占領軍ハ之ヲ記録シテ帰ラレタリ。

一、五月十四日占領軍十名（通訳藤川五郎氏）来村、右八名並ニ大野郡川登村ニアル一名、北海部郡南津留村ニアル一名ヲ本村中ノ谷ニ合祀スベキヲ命ゼラル。但シ其ノ時季方法ハ大分ノ本部ヨリ電話ヲ以テ通報スルニアリ、之ニヨリ着手スベキヲ命ゼラル。

一、五月十八日、占領軍四名来村（通訳日本人ナシ）、当時生存セル人ノ氏名ヲ調査セラレ、名モ当方ニテハ不明ナル旨ヲ答フ。猶、亜米利加軍トシテAspinoe（アスピノー）ト認ムト言ハレ、且ツ今後ニ於テモ氏名判明セバ報告スベキヲ命ゼラル。報告場所大分占領軍本部ナリ。

一、八月二十八日、福岡占領軍本部より（佐伯寿賀旅館投宿）占領軍四名（通訳一名）遺骨受領の為来村、役場

より泥谷、小野案内す。墜落現場二個所埋葬四名分
中ノ谷橋ノ上墓場四名分、計八名分持ち帰る。
一、昭和二十二年九月九日、福岡占領軍本部よりB二九墜落現場再調査の為来村、明治村駐在首藤巡査並ニ泥谷書記現場に案内す。尾翼墜落現場の前埋葬地を再掘し、少量ノ遺骨を持ち帰りたり。
一、昭和二十二年九月十二日、別府進駐軍本部より来村昭和二十年五月七日午前九時頃、B二九一機宇藤木の山中に墜落、搭乗員戦死者八名分の遺骨は昭和二十一年八月二十八日、福岡占領軍本部員により掘出し持ち帰る。此の外本村内には米軍機は一機も墜落セザル旨の証明書四通、村長（市野瀬善之）に依り記入の上持帰る。

（註）記録分中、片仮名から平仮名に変わっているが原文のままとした。

B二九墜落は旧明治村にとっては大事件であり、戦後箝口令が出されたのは、捕虜の扱いが問題になることを恐れたためであろう。彼は佐伯駅から列車で小倉方面へ移送され死亡したらしいが、そこでの関係者は戦犯として処刑されているのである。当時の空気は異常であったというが、戦争とは異常で今では考えられないことが普通であったようである。

戦中我家にとっての大事件は、米軍機による反戦ビラを小学生より祖母が入手したことで、これが米国のスパイであると通報されたことである。幸い祖父が日本海軍に寄付して海軍大臣米内光政の感謝状があったことからスパイ容疑は晴れたが、通報者が小学校の教師であったのは驚かされた。戦後その教師は何事もなかったように我家を訪れていたのには驚いたものである。

戦後、金属製の万年筆のようなものを拾った私は我家で投げて遊んでいたところ、突然シュシュと白煙が出て驚かされたが、これは戦時中、米軍機が投下した地雷であった。幸い信管の故障で爆発しなかったので助かったが危いところであった。米軍はハンドバック型の地雷も投下していて犠牲者も出ていたらしいが敗戦国日本では問題にされなかったようである。

我が家の戦中戦後で一番困ったのは食糧事情で、カボチャの葉や芋の葉も食したが、これはマズかった。金があっても食べものがない時代であった。

近頃は田畑が次々と埋立てられ宅地化されるのは、昔の食糧事情を知る者にとっては理解できない。身近な歴史、戦中戦後を学び将来に生かしていきたいものである。

自宅裏の防空壕
昭和二十年五月七日　隣家の人と逃げ込んだ。
現在、防火水槽になっている。

〈参　考〉

・B二九

ボーイングB二九爆撃機。全長三〇・一八メートル　翼幅四三・〇五メートル　重さ六四トン　航続距離六六〇〇km　キャノン砲一基・機関銃十基、爆弾九〇九〇kg搭載　乗員十名、戦時中、日本各地を空襲する。

・海軍機「紫電改」

局地戦闘機　昭和二〇年一月採用。正式名　紫電二一型横須賀・松山基地等に配備　東京・四国・中国・九州の防空に活躍する。全長九・三四六メートル　翼幅一二メートル　重さ二・六トン　航続距離一七一五km　二〇mm機関砲四基、爆弾五〇〇kg搭載

・憲兵（憲兵隊）

軍隊の警察制度。軍隊内部の犯罪摘発を目的とし、治安維持に努める。明治十四年東京に設置のち全国に広がる。佐伯には海軍航空隊が設立された昭和九年、佐伯市松ケ鼻に憲兵隊分遣隊が設けられた。